

取組：英語による言語活動の割合の向上とパフォーマンステストの実施状況の改善

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

- ◆ 中学校

スピーキングテストの年間実施回数は3.4回に対し、ライティングテストの実施回数は1.9回であり、自分の意見を書いたり理由を述べたりすることができるよう、ライティングテストを定期的に行うことで、継続して生徒の発信力を育成する適切な授業を展開する必要がある。
- ◆ 県立高校

求められる英語力を有する生徒の割合は、令和2年度の本県独自調査では、前年度比で4.9ポイント上昇し、41.6%であったが、特定の科目において言語活動の割合が低いことや、スピーキングテストが十分に実施されていないことが、生徒の英語力の向上を妨げる一因となっている。

Plan

- 取組計画
- ◆ 小・中学校
 - 目標達成するための各種研修等の実施

愛知県の英語教育における課題の改善を目的とし、教員や指導主事等を対象とした様々な研修
 - 目標達成するための特定地域の研修等の実施

大学教授等を講師として招聘した研修
研修協力校等での公開授業及び研究協議 等
- ◆ 県立高校

生徒の発信力（話す力・書く力）強化に向けた効果的な言語活動やパフォーマンステストを研究・開発し、成果を発信する。

Do

- ◆ 小・中学校
 - 学校教育担当者会

愛知県の英語教育における課題について共有し、その対策について共通理解を図る。
 - 愛知県小中学校教育課程研究集会

学習指導要領の趣旨を踏まえた実践例を基に、指導方法や学習評価等、指導上の諸問題について協議し、授業改善を図る。
 - 目標達成するための特定地域の研修等（詳細は別紙一宮市の取組参照）
- ◆ 県立高校
 - 高等学校教育課程愛知県協議会

指導と評価の一体化等について、全英語科教員に対しYouTubeで動画を配信
 - 授業力向上研修

ICTを活用した言語活動やパフォーマンステスト等を発信
- ◆ 小・中学校及び県立高校
 - イングリッシュ1Dayツアー

異文化体験を通して相互理解の大切さを学び、英語に対する興味等を高める。

Check

- 中学校では、生徒の言語活動や教員の英語使用状況はともに割合が減少しており、学習指導要領の趣旨の理解が十分でない。
- 中学校での年間のパフォーマンステストの実施状況は、学習到達目標の達成状況の把握の割合とともに上昇しており、パフォーマンステストを通して生徒の学習状況が把握されつつある。
- 県立高校では、各校が感染症の拡大防止を最優先させたことにより、言語活動の割合は減少しているが、パフォーマンステストの割合は向上しており、指導と評価の一体化が進みつつある。

| 中学校 | R1 | R3 |
|------------------------------------|------|------|
| 授業における発話の50%以上を英語で行っている教員の割合(%) | 53.7 | 46.7 |
| 生徒の英語による言語活動時間の割合が50%以上である教員の割合(%) | 65.5 | 51.9 |
| 各学校における年間に実施するスピーキングテストの平均回数(回) | 3.6 | 3.8 |
| 各学校における年間に実施するライティングテストの平均回数(回) | 1.9 | 2.4 |

| 県立高校 | R1 | R3 |
|------------------------------------|------|------|
| 生徒の英語による言語活動時間の割合が50%以上である教員の割合(%) | 35.3 | 33.4 |
| 各学校における年間に実施するスピーキングテストの平均回数(回) | 1.0 | 1.1 |
| 各学校における年間に実施するライティングテストの平均回数(回) | 1.4 | 1.6 |

英語教育実施状況調査

Action

- ◆ 小・中学校及び県立高校
 - 学習指導要領の趣旨を踏まえ、言語活動を中心に据えた授業改善を推進する。
 - 学習到達目標をもとに単元目標を設定し、パフォーマンステストを通して学習状況を適切に把握する改善を推進する。
- 上記2点の手立てとして、動画や資料を作成し、それを活用して研修を充実させる。

成果の普及

- 県内の市町村及び教育事務所の担当指導主事を対象とした学校教育担当者会「英語教育改善プラン」について周知するとともに、特定地域における本事業の成果や課題について報告をし、他の市町村へ普及
- イングリッシュ・フォーラム

拠点校の代表校2校が、生徒の言語活動を中心に据えた授業やICTを活用した授業についての研究成果をスライド動画にまとめ、県立高校等に普及

取組：小・中・高等学校を通じた英語強化事業

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

英語担当教員の英語力及び授業における英語担当教員の英語使用状況、生徒の英語による言語活動の実施状況における調査結果は、年々上昇傾向にあるが、愛知県全体の平均と比べると十分とは言えない。また、学校における年間のパフォーマンステストの実施回数は、スピーキングテストについては市内各校で年間平均8回実施しているが、ライティングテストは年間平均6回に留まっている。こうした現状から、新学習指導要領に即した評価方法の研究と周知及び小・中・高等学校の指導の連携が当市における喫緊の課題であると考え、事業を計画・実施した。

Plan

外部専門機関等の連絡調整

あいちスーパーイングリッシュハブスクール
愛知県立一宮西高等学校

愛知県教育委員会

一宮市教育委員会

研修協力校

一宮市立葉栗小学校
一宮市立奥中学校

《外部専門機関》
・近隣大学等

指導・助言

一宮市 ALT (25名)

言語活動の充実及び校種間の学びをつなげる指導法の研修

一宮市教育研究会

小学校英語部会・中学校英語部会

研修の企画・運営

一宮市各小中学校

Do

■研修協力校における研究授業・研究協議（小学校・中学校）

一宮市立葉栗小学校において

- ① 計5回、5名の授業者による授業公開・研究協議会の実施
- ② 研究発表会における全学年、全学級の授業公開の実施（オンライン公開）

一宮市立奥中学校において

- ① 計5回、3名の授業者による授業公開・研究協議会の実施
- ② 研究発表会における代表学級の授業公開・研究協議会の実施（オンライン公開）

■外部機関と連携した英語指導力向上のための研修

小・中学校指導力向上研修

教員の英語使用状況の改善、新学習指導要領に即した評価方法の研究、児童生徒の意見や考えを引き出す言語活動の工夫についての研修を実施



英語運用能力向上研修



Check

- 指標1 年間5回以上実施する授業研修に、小学校、中学校及び高校の英語教員が参加している

研修協力校、学習指導法評価研究委員会、高等学校の積極的な授業公開により、全12回の授業研修を実施し、多くの教員が参加できた。

- 指標2 授業における児童生徒の英語による言語活動の割合が50%以上である教員の割合を令和3年度までに80%にする

英語教育実施状況調査の結果によると、小・中合わせて74.2%に留まり、目標である80%を達成することができなかった。

- 指標3 各学校における年間のパフォーマンステストとして、スピーキングテスト及びライティングテストを令和3年度までに年間計8回以上実施する

スピーキングテストは年間平均8回、ライティングテストは年間平均6.2回の実施に留まり、目標は達成できなかった。

Action

■成果

研修協力校による授業公開により、市内各校からの参加者に、今後の外国語活動・外国語科の目指す言語活動を中心に据えた授業モデルを示すことができた。

■課題

コロナ禍という特殊な状況下もあり、事業全体のねらいや各指標について十分な周知を図ることが難しく、研修の成果を全市に十分に広められていない。特に、指標2・3に関しては、今後も継続して取り組むべき本市の課題である。

■課題（指標2・3）に対して

言語活動について、特に「話すこと」以外の領域における実施方法等について県内版CAN-DOリストを参考に、引き続き学習指導法・評価研究委員会を中心に研究し、夏季・冬季の研修会等を通して市内各校へ広めていく。

現状の課題

- ・新学習指導要領に基づいた授業展開に対する理解促進及び評価の在り方の研究
- ・パフォーマンステストの評価基準の更新及び評価の共有

具体的な取組と工夫

- ・朝日大学から講師を招き、校内で本校英語科教員を対象に新学習指導要領を踏まえた授業改善と評価の在り方について研修を実施
- ・地区別授業研修会、授業力向上研修会等を通して、講師や大学教授等から指導・助言を受けるとともに、他校の英語教員との研究協議を通して授業力の向上を図った。
- ・パフォーマンステストの見直しと評価基準の更新
- ・国際教養科の授業におけるディベート活動を取り入れた、教材の開発
- ・高大連携による国際教養科2年生対象の異文化理解講座の実施

成果①

- (1) 全国高等学校英語スピーチコンテスト
 - ・尾張地区予選: 1位、3位
 - ・愛知県大会: 1位
 - ・東海北陸ブロック大会出場
2大会連続で県大会1位、4大会連続で東海北陸ブロック大会出場を果たした。
- (2) 実用英語技能検定の合格者
 - ・1級: 2年生1名
 - ・準1級: 2年生1名、3年生6名
 - ・2級: 2年生16名、3年生29名
 - 4技能の習得に対する生徒の意識が高まり、国際教養科では大半の生徒が準1級の取得を目指すようになった。

成果②

- (1) 新学習指導要領に基づいた主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善を目指し、研修で学んだ活動を授業で取り入れた。
- (2) ディベート活動を通して、生徒が様々な社会問題について関心を持ち、主体的に調査をして、データを考察し、自分の意見をまとめる活動ができた。
- (3) 新学習指導要領を踏まえた評価の在り方について研究し、教員間の共通理解が進んだ。

課題及び改善案

- (1) 課題
 - ・国際教養科における先進的な取組の成果が普通科の授業に十分還元されていない。
 - ・ICTの効果的な活用方法について、教員間での共通理解が不十分である。
- (2) 改善案
 - ・積極的に授業を公開し、相互に参観することで、英語科全体で指導のノウハウを共有し合う機会を増やす。
 - ・ICTの活用方法について、他教科の実践も参考にしながら、英語科としての安定的・継続的な活用方法を検討する。

課題

- ・国際教養科と普通科の生徒間の英語の能力の差が大きい。また、英語に対して苦手意識をもっている生徒も多い。
- ・生徒の英語力を正確に把握し、バランスの取れた英語力を育成する必要がある。
- ・「国際言語としての英語、コミュニケーション言語としての英語」の有用性に十分に気付いていない生徒がいる。

具体的な取組と工夫

- ・生徒がより多くの英語に触れることができるよう、オールイングリッシュでの指導を実施
- ・毎週木曜日をイングリッシュ・デーに設定し、英語による学校生活を体験する機会を提供
- ・スピーキング、ライティング能力を把握するために、パフォーマンステストを計画的に実施
- ・国際教養科1年生による近隣の小学校での出前授業の実施
- ・国際教養科2年生を対象とした、ALT等と共に過ごす2日間のイングリッシュキャンプの実施
- ・夏季休暇中のオーストラリアへの生徒派遣(希望者のみ、2週間ほど) * 令和3年度は中止
- ・オーストラリアの姉妹校等とのオンライン授業の実施(国際教養科・普通科)
- ・タイの高校生との英語による手紙交流の実施(普通科)
- ・小学校・中学校を含めた校内外の授業参観や研究協議の実施。また、大学等からの有識者による研究協議の場での指導・助言
- ・4技能を測定する民間の外部試験(実用英語技能検定など)の活用
- ・実用英語技能検定準2級、2級合格を目的とする補習を実施

成果

・英語力の大幅な伸長

国際教養科での英語検定合格者割合

○準2級以上(入学時→1年→2年→3年)

現3年生 39%→65%→77%→84%

現2年生 14%→66%→74%

現1年生 19%→48%

○2級以上(入学時→1年→2年→3年)

現3年生 13%→29%→55%→74%

現2年生 0%→14%→37%

現1年生 0%→6%

* 令和4年1月現在

円滑なコミュニケーションに必要な態度の育成

・小学校への出前授業の準備やオーストラリアの姉妹校とのオンライン授業を通して、聞き手の存在を意識した発信を工夫できるようになった。

・プレゼンテーションを通じて、自国の文化に対する興味が湧いたり、自分の意見をもつことができるようになったりした。

課題及び改善案

- ・地元の市教育委員会と連携した小・中・高の学びの継続性の担保
- ・授業や教材へのICT機器の効果的な利用法の研究
- ・観点別学習状況の評価(特に主体的に学習に取り組む態度を測る客観的方策)の研究
- ・民間の外部試験の結果を共有し、4技能を統合させた、より効果的な指導法の研究
- ・ライティング能力の育成のための体系的な指導法の研究